

## ■少子化の時代にどのような教育を行っていくのか

6月8日、県立高校の再編計画が発表されました。その背景には少子化による奈良県の高校生人口の減少があります。社会の変化や大学入試改革、保護者や生徒のニーズが多様化していく中で、公教育の担い手として、小・中・高それぞれの校種でどのような教育を行っていくのかを改めて問い直す必要があります。

このような社会情勢の中で、奈良市唯一の市立一条高校においても、どのような教育を行っていくのか、市民はどのような教育を期待しているのか、ということについて議論していかなければなりません。私は一条高校を奈良市立の小・中学校の目指すべき教育の姿が示されているフラッグシップ校にしていきたいと考えます。小・中学校の学びが一条高校の学びに繋がり、一条高校の生徒の姿が奈良市の目指す子どもの姿になってくれればと思っています。具体的に、どのような高校生の姿をイメージしているかということ、奈良市立の中学校を卒業した、ある生徒のことが思い浮かびます。



## ■自分で目標を見つけ、果敢にチャレンジする



その生徒は、現在東京の大学に通っていますが、高校生の時は、政治や教育について語り合うことは無理だと諦めていました。しかし、高校三年生になる春休みに東京で開催された第2回全国高校生未来会議<sup>\*</sup>に参加し、熱心に議論できたことで「自分と同じ思いを持つ高校生が奈良にもいるのではないか」と考えました。そこで市長の公式フェイスブックに「奈良で高校生会議を開きたいので支援してほしい」というメッセージを送り、後日、市長と対面する機会を得て、会議の開催を実現させました。この生徒は「奈良高校生会議」を振り返って、「やりたいことは、方法次第で実行できる」ということを実感したそうです。

この生徒のように、自分で目標を見つけ、果敢にチャレンジする。夢の実現に向け、計画を立て、人を巻き込み、積極的に働きかける。このような姿は、「奈良市の新しい学びのプロジェクト」で示した「未来の地図を描き、自ら前へふみ出す力」と重なっていると思います。この力はどのように身に付くのでしょうか。私は、子どもたちが興味のあることやおもしろいと思っていることを周りの大人が後押しすることが大事であると考えます。

<sup>\*</sup> 東京に全国から約100名の高校生が集まり、政治などについて議論する実践型合宿イベント。これまでに3回開催されている。

## ■「やっでござらん」と後押しする大人が必要

この話に関連して、京都産業大学で行われた対談について話をしようと思います。2年前、京都産業大学では各界の著名人を招いて、『マイ・チャレンジ 一歩踏み出せば、何かが始まる！』をテーマに対談が行われました。この対談は、総合生命科学部教授の永田和宏先生が「大きな決断をした時の話や、思い切って一歩を踏み出した瞬間などの経験を語ってもらい、学生に自分の可能性を信じ、一歩を踏み出すことの大切さを伝えよう」という趣旨で企画したものでした。

対談の中で、京都大学教授の山中伸弥先生は、「研究者としてやっでいける実感を持ったのはいつか」という質問に対して、

大学院生になって初めての薬理学の実験で、指導の先生が出した仮説と違う結果が出て、「なぜ?」「どうして?」と興奮した。先生に実験結果を報告すると、「そんなはずはない」と一蹴するのではなく、「おお、すごいすごい」と一緒になって喜んでくれた。また、この研究を続けるよう後押しをしてもらえた。あの時の興奮を思い出すと、自分は研究者に向いていると今でも思う。今の自分があるのはこの実験があったからだ。

というように答えています。

また、京都大学総長の山極壽一先生は、京都大学総長に就任した際に「おもしろいことやりましょう」と宣言した後、大先輩から「関西弁で『おもしろい』いうのはな、もうひとつ言葉が続くんや」と言われた、というエピソードを紹介しています。『おもしろい』の後に続く言葉は、何か、それは『ほな、やっでみなはれ』です。

子どもがおもしろいと感じる。「じゃあやっでござらん」と大人が背中を後押しする。それが、「自ら前へふみ出す力」の原動力となります。子どもたちが一歩をふみ出す時には「やっでござらん」と後押しする大人が必要なのです。

「やっでござらん」と  
後押しできる大人がいる



「自ら前へ踏み出す力」の原動力に

小中学校の時、  
大人に背中を押されてきたことが  
つながっていく

## ■子どもたちの背中を押し、「自ら前へふみ出す子」を育てる

小・中学校の生活の中で発達段階に応じ、その都度かかわる先生が声をかけ、背中を押し。子どもたちは自信をつけて、「自ら前へふみ出す力」を身に付けていく。そのような子が一条高校に入学し、その姿に憧れ、また小・中学校の子どもが育つ。そういった嬉しい循環ができればと思います。

そのためにも、まずはそれぞれの学校で、目指す子ども像を皆で共有し、先生方が子どもたちの背中を押し、「自ら前へふみ出す子」を育てていってください。